

建築学生ワークショップ出雲2019

architectural workshop izumo

Call for entry

応募締切

5.31

参加学生募集!

日本文化の原点 - 出雲

「平成の大遷宮」終わりの年に

2019年夏、古代より現代に受け継がれてきた、わが国を代表する神聖な場所、出雲大社周辺区域にて、小さな建築空間を実現する建築学生ワークショップを開催します。出雲大社は、大国主大神様をお祀りしている神社。「むすび」の御霊力を司られ、古代より現代も多くの人々がお参りに訪れる「縁結びの神様」でもあります。この神聖な場所において「平成の大遷宮」満了の年に、出雲にて開催いたします。

「神聖な場所を受け継ぐワークショップ」として開催するこの取り組みは2001年から始まり、過去に山添村(奈良県)・天川村(奈良県)・丹後半島(京都府)・沖島(滋賀県)などの関西近郊の各地で行われ、それぞれの過疎化した地域を対象に関西の学生らが提案し、開催地の支援を得ながら、有意義な成果を残してきました。2010年からは、今までの取り組みの志向を変え、開催地の方たちと広く、一般社会にも投げかけてゆけるように、共同での開催となることを目指し、平城宮跡や竹生島、高野山金剛峰寺や明日香村キトラ古墳、比叡山延暦寺そして昨年の伊勢神宮での開催など、日本の“聖地”とよばれる場所を開催地としています。公募により全国から集まった参加学生たちが、これらの特有な場所がもつ神秘的な力に対してどのようにリサーチし、真剣に考え向き合うのかを検討し、空間体験のできる規模(原寸大の建築)を制作し、建築のプロセス全体を体験する機会として開催していきます。

本開催は、公募により参加学生を5月末日に決定したのち、8つの班に分かれ、6月22日(土)に全国から出雲に集まり、現地調査を開始します。出雲大社では、大国主大神さまをお祀りされている御本殿を中心として、境内・境外の大神さまと由縁深い神々の空間への訪問を重ね、日々の感謝を捧げる祈りの場であることを体験し、開催テーマとしての位置づけにもあるこの場所が持つ特有の力や意味を身体で感じ、その中から各々の班で発想の原点を見出していきます。さらに周辺地域の街歩きを繰り返し、いま現代に生き、出雲で学んでいることへの意味をみずから問うていきます。

7月27日(土)の提案作品講評会では、国内外にて活躍をされる建築家の先生方を中心とした講評者の指導のもと、日本における貴重で特殊な環境における場所性に根づいた実作品をつくりあげる意味を問い正され、7月28日(日)の実施制作打合せでは、地元の建築士や施工者、大工や技師、職人の方々に伝統的な工法を伝えていただく機会を得ながら、日本を代表する組織設計事務所の方々や多くのゼネコンに所属される技術者の皆様による実技指導をいただくことで、建築の考え方の基礎となる「思考の構造」となり得る経験になります。さらに、そのような貴重な経験を通して得た同世代の仲間たちは、今後、建築の活動を続けていく上で、お互いに刺激し合い、高め合っている「生涯続く仲間」になっていくのでしょうか。

9月1日(日)、この参加学生たちが制作した小さな建築が8体、出雲大社周辺区域に実現します。当日は、これらのプロセスを経て創出した建築空間を1日だけ、どなたでも体験していただけます。そして、建築・美術両分野を代表する評論家をはじめ、第一線で活躍をされている建築家や美術家の方々、世界の建築構造研究を担い教鞭を執られているストラクチャー・エンジニアによる講評者にお集まりいただき、公開プレゼンテーションを開催いたします。会場では、出雲をはじめとした島根県周辺の方々や、これまでの開催地の関係者の皆さま、そして全国から集まる建築関係者や一般参加者に向けた発表を行います。

建築のプロセスに胸を躍らせる3ヶ月。参加学生たちが気の遠くなるような歴史をもつ出雲の伝統を学び、この文化に位置づけた解釈を生み出すのか。大社に存在し続ける建築様式に連なり、訪れた人たちの心を落ち着かせ、祈りを捧げるような空間体験と提案の発表に、どうぞご期待ください。



御本殿 (正面)



御本殿 (側面)



御本殿



拝殿



神楽殿

Architectural Workshop Izumo 2019

開催場所 **出雲大社周辺区域（島根県）**

出雲大社は、島根県出雲市にある大国主大神様をお祀りしている神社。古代より現代も多くの人々がお参りに訪れる「縁結びの神様」です。



現地滞在スケジュール

6月22日(土) 現地説明会・調査(日帰り)

7月27日(土) - 7月28日(日) 提案作品講評会(1泊2日)

8月27日(火) - 9月2日(月) 合宿にて原寸制作(6泊7日)

9月1日(日) 公開プレゼンテーション

開催期間 **2019年8月27日(火) - 9月2日(月) 6泊7日**

※ 合宿にて原寸制作
※ 9月1日(日) 現地に公開プレゼンテーション

参加費用 **実費** (宿泊費、保険代、図録・資料費、一部食費等 ¥35,000 事前徴収)

※ 現地までの交通費は各自別途負担となります。
※ 開催地の有志の方々のご協力と、学生の参加費により運営をしています。

参加申込 **ウェブサイトからお申込みください** <http://ws.aaf.ac>

※ 参加者募集期間 2018年12月1日(月) - 2019年5月31日(金) 23:59 (必着)
※ 参加対象者 建築および都市、環境、デザイン、芸術など、これに類する分野を学ぶ学生および院生【参加学生】定員：60名程度(大学院生8名+参加部生42名+運営サポーター10名) 8グループを予定
ただし、定員を超えた場合は、主催者による選考をおこないます。予めご了承ください。
【運営サポーター】定員：5~10名程度(参加・宿泊費無料 開催期間中) 開催期間中、合宿期間中の運営サポーターも募集いたします。(学部は問いません)

※ 交通費 各自別途負担

参加予定講師

日本の文化を世界へ率いる方々を中心として、建築・美術 両分野を代表する評論家をはじめ、第一線で活躍をされている建築家や都市計画家、構造研究を担い教鞭を執られているストラクチャー・エンジニアによる講評。また近畿二府四県の大学で教鞭を執られ、日本を代表されるプロフェッサー・アーキテクトの皆さまにもご参加いただけます。

太田 伸之 (前クールジャパン機構CEO)	江村 哲哉 (構造家 アラップ構造エンジニア)	竹原 義二 (建築家 摂南大学 教授)
小松 浩 (毎日新聞社 主筆)	腰原 幹雄 (構造家 東京大学 教授)	長田 直之 (建築家 奈良女子大学 准教授)
建島 哲 (美術評論家 多摩美術大学 学長)	櫻井 正幸 (旭ビルウォール 代表取締役社長)	平田 晃久 (建築家 京都大学 准教授)
南條 史生 (美術評論家 森美術館 館長)	佐藤 淳 (構造家 東京大学 准教授)	平沼 孝啓 (建築家 平沼孝啓建築研究所 所長)
山代 悟 (建築家 芝浦工業大学 教授)	陶器 浩一 (構造家 滋賀県立大学 教授)	安井 昇 (建築家 桜設計集団 代表)
五十嵐太郎 (建築史家・建築評論家 東北大学 教授)	芦澤 竜一 (建築家 滋賀県立大学 教授)	横山 俊祐 (建築家 大阪市立大学 教授)
	遠藤 秀平 (建築家 神戸大学 教授)	吉村 靖孝 (建築家 早稲田大学 教授)

建築学生ワークショップとは

建築ワークショップは、建築や環境デザイン等の分野を専攻する大学生を対象にした、普段の大学生活では体験できないスケールで作品制作を行う地域滞在型のワークショップです。国内外にて活躍中の建築家を中心とした講師陣の指導のもと、開催地の歴史や地域環境を研究しながら、他大学生との交流の中でその場所における社会的な実作品をつくりあげる経験を目的としています。

“今、建築の、原初の聖地から” 伝えたいことを、空間として表現してください。

場所のもつ歴史や意味、地形や風の流れといった文脈を読むことを始点として建築はつくられていきます。つまり建築をするという行為の原点は、「場」を読み解くかこそが始まりであり、重要なことだといえます。これを国内でもまれに見る森林空間と古来の伝統的建築様式を今に伝える聖地、出雲大社で学ぶことは、これから建築の道を進み、次の日本を背負う学生たちにとって、最も大切な実学体験となり、これから建築をつくる揺るぎない基軸ともなっていくでしょう。

【スケジュール】

- 5月9日(木) 参加説明会開催(東京大学) 山代悟
- 5月16日(木) 参加説明会開催(京都大学) 竹原義二
- 5月31日(金) 23:59 必着 参加者募集締切(参加者決定)
- 6月22日(土) 現地説明会・調査
- 7月13日(土) 各班エスキース(東京会場・大阪会場)
- 7月27日(土)~28日(日) 提案作品講評会と実施制作打合せ
- 27日(土) 提案作品講評会
- 28日(日) 実施制作打合せ
- 7月29日(月)~8月26日(月) 各班・提案作品の制作
- 8月27日(火)~9月2日(月) 合宿にて原寸制作ファイナル
- 27日(火) 現地集合・資材搬入・制作段取り
- 28日(水) 大学生×高校生
- 9月1日(日) 公開プレゼンテーション
- 2日(月) 撤去・清掃・解散



出雲大社 勢溜(せいだまり) 参道入口



出雲大社 荒垣内(境内中心部)

【制作内容】

“唯一無二の歴史的風土を守るために、あなたの提案を実現化してください”

原寸模型を地域産材(自然素材 / 木材、和紙、土、石など)の材料で制作

Architectural Workshop Izumo 2019

開催記念 説明会 講演会

全国の建築学生が合宿にて制作を行う「建築学生ワークショップ」を、今年は8/27(火) - 9/2(月)に出雲・大社周辺区域にて開催します。このワークショップの参加募集の説明会と開催を記念して、活躍中の建築家が自身の学生時代の体験を通して、現在の作品にどう影響しているのかをレクチャアさせていただきます。ワークショップへの参加を予定していない方でも、どうぞお気軽にご参加ください。

東京会場

東京大学 (弥生キャンパス)
農学部 弥生講堂アネックス

東京メトロ南北線「東大前駅」徒歩3分

東京メトロ丸の内線・大江戸線「本郷三丁目駅」徒歩10分

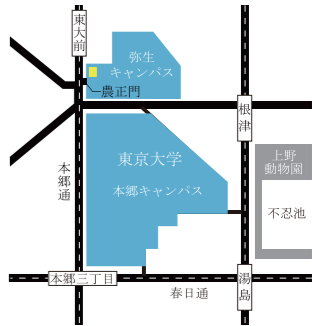
5月9日|木|18:30 - 20:00 (18:00 開場)

入場無料 | 定員：先着 100名 | 要申込 ※当日のご参加も若干名様まで可能です。
※開催日程・場所は予告なく変更する可能性があります。
ウェブサイトを再度ご確認ください。



基調講演 **山代悟** (建築家)

69年島根県生まれ。93年東京大学工学部建築学科卒業後、Responsive Environment 共同主宰。95年東京大学大学院修士課程修了し、95-02年まで横総合計画事務所に勤める。2002年にビルディングランドスケープ設立共同主宰。02-07年、東京大学大学院建築学専攻の助手を経て、07-09年 東京大学大学院建築学専攻の助教を勤める。10年大連理工大学 建築と芸術学院 海天学者、客員教授。17年より芝浦工業大学建築学部建築学科、特任教授。現在、ビルディングランドスケープ共同主宰、芝浦工業 特任教授、大連理工大学 客員教授、東京電機大学 非常勤講師、博士(工学)。



京都会場

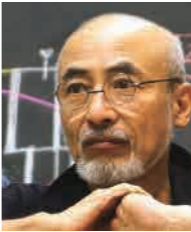
京都大学 (吉田キャンパス)
百周年時計台記念館 国際交流ホールIII

京阪本線「出町柳駅」徒歩10分

京都市営バス「京大正門前」または「百万遍」下車 徒歩10分

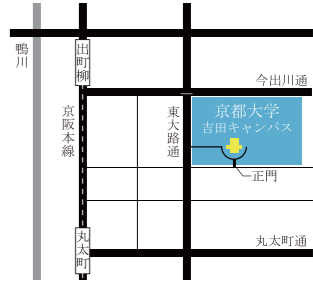
5月16日|木|18:30 - 20:00 (18:00 開場)

入場無料 | 定員：先着 100名 | 要申込 ※当日のご参加も若干名様まで可能です。
※開催日程・場所は予告なく変更する可能性があります。
ウェブサイトを再度ご確認ください。



基調講演 **竹原義二** (建築家)

1948年徳島県生まれ。建築家石井修氏に師事した後、1978年無有建築工房設立。2000~13年大阪市立大学大学院生活科学研究科教授。現在、摂南大学理工学部建築学科教授。日本建築学会賞教育賞・村野藤吾賞・都市住宅学会業績賞・こども環境学会賞など多数受賞。住まいの設計を原点に人が生き生きと暮らす空間づくりを追求している。著書に「無有」「竹原義二の住宅建築」「いきている長屋」(編著)「住宅建築家 三人三様の流儀」(共著)。



2010 奈良・平城宮跡

2011 滋賀・竹生島

2015 和歌山・高野山

2016 奈良・明日香村

2017 滋賀・比叡山

2018 三重・伊勢

主催

© **AAF** 知性あふれるレクリエーションを。 Art & Architect Festa

NPO/AAF Art&Architect Festa 特定非営利活動法人アートアンドアーキテクトフェスタ ウェブ www.aaf.ac Eメール info@aaf.ac

出雲大社



島根県教育委員会

旭ビルウォール株式会社

特別協賛

AGB

千家和比古（出雲大社 権宮司）

× 腰原幹雄（構造家 | 東京大学生産技術研究所教授）× 佐藤淳（構造家 | 東京大学准教授）× 平沼孝啓（建築家 | 平沼孝啓建築研究所主宰）



座談会の様子（出雲大社・社務所にて）

——— 全国の大学生が参加するこの建築学生ワークショップは、毎年、場所を移しながら開催してきました。歴史の特性をはっきりと持つ開催地と、周辺的生活文化を合わせて調査することにより、観光として訪れるだけでは知ることのできない街や地域との関わりや、建築を保全していく造り方の技にも触れ、制作を含めた地域滞在をします。神聖な場所の静粛な空間からコンテキストを見出し、現場で建築の解き方を探るきっかけを経験したいと考えております。出雲大社は、大国主大神さまをお祀りしている神社。古代より現代も多くの人々がお参りに訪れる「縁結びの神様」でもあります。60年に一度の式年遷宮で建築をつくり変え技術を継承することでもこの場所の特性を用いるため、大きく分けて「歴史」「場所性（地形）」「現代の問題」の観点から求めるものを探り、ワークショップ開催の目標となるお言葉や意義について、この座談会でお伺いします。次世代を担うであろう、建築や芸術、デザインを学ぶ学生たちが出雲大社に身を置き、実学として場の空気や伝統構法を体験しながら学び、貴重な経験を通じて得た体感を、2019年夏、小さな建築空間で表現したいと思っています。古代より現代に受け継がれてきた大社で、空間性へのテーマや実現へのコンセプトのヒントとなる話題を、どうか合わせてお聞かせください。

本日は、開催地として多大なご尽力をくださいます出雲大社様にて、参加学生にむけて導きをくださる、千家和比古権宮司様、そしてこの建築ワークショップを初年度から見守り続けてくださる、東京大学の腰原先生、佐藤先生、そしてオーガナイザーの役割を担い続けてくださいます、建築家の平沼先生と共に、「平成の大遷宮」満了の年に合わせた出雲開催についてお聞きします。

平沼：出雲の国は中国や朝鮮半島に近く、日本で最も早く高度な文明を発達させた地域だと聞き及んでおります。そして出雲大社の門前町として大社と共に歩んでこられた街。その大社は、大国主大神さまをお祀りしている神社として「むすび」の御霊力を司られ、古代より現代まで多くの人々がお参りに訪れる「縁結びの神様」と仰がれています。また本年3月まで行われている平成の大遷宮を機に、日本はもとより世界から注目をされています。まずは、この地が現代にまで続く聖地と言われる神聖な場所となり、現代にも繋いでこられた思想の背景と、この地をお守りし暮らす人たちの生活文化と、自然環境はどのようなものだったのでしょうか。

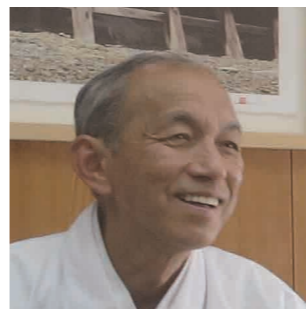
千家：近接する出雲大社の摂社の命主神社境内では約2,000年前頃の磐座祭祀関係遺跡が発見されており、境内及び周縁域はその頃から聖地的認知がなされてきたようです。その後そうした文化がどのように展開したのか、時系列物証的に追うのは難しい状況です。現在の境内域では4世紀代の祭祀関係遺物が確認されていますので、現時点の物証からは変遷過程の問題はありますが、この頃から現在の出雲大社に繋がることになるでしょう。聖地という舞台について古社の環境空間を見ると、一つの類型的様相が看取できます。「水（川）」との関係です。この境内地の後背には、中央に祭祀的カンナビ型の岩山の八雲山があり、その左右に鶴山、亀山という山丘が控えています。八雲山両側の谷筋からそれぞれに川が流れ出て、現在は境内を画す垣の東西両側外に沿って人工造成された流路によって流れています。近世前期以来のことです。平成12年に境内で往昔の高層の御本殿の巨大柱が検出された時、古い河道も確認され、遺物から7～8世紀代には機能していたことがわかりました。つまり、古代に二つの川は谷筋の方向軸のままに境内中央に向って両方から直進して、八足門前付近でY字状に合流していたことが想定されます。こうした川が合流している

処を「河合（川合）」と言います。Y字状に河合を形成して一筋となって南に流れていた状況が、古い時代の境内の環境空間だったことが分かってきました。古代人は河合を現代で言うパワースポットとみていたようです。川というのは古代の伝承世界では神様の通り道、或いは目には見えないエネルギーの通り道、それが合体し増幅される環境に神祭りの場を設けたと想定されます。典型例が平安京の北東隅にある下賀茂です。賀茂川と高野川が合流して鴨川と名前を変えて一筋に流れますが、Y字状の河合の上側には、文字通りの河合神社が鎮座、続いて世界遺産の「糺の森」があり下鴨神社が鎮座です。糺の森の「糺」は「たたす」で「立ち現われる」という意味です。「山城国風土記逸文」の中に下鴨神社に関する丹塗矢伝承があつて川を神様の通路と理解していたことが知られます。川を通る目には見えないエネルギーが合わさって「立ち現われてくる森」だから糺の森という名付けと理解されます。出雲大社で位置的に糺の森に相当するのが背後の祭祀性カンナビ型の八雲山です。原初的に神の座として祭祀対象だった可能性もあります。伊勢神宮も川が合流する環境地、また今も三輪山を祭祀対象として本殿建物を造らない大神神社も同じ。室町時代の絵図によると神体山の三輪山を中心対象としてY字状の河合形成の神祭景観が見えます。古代人が神祭りの場を設け聖地化する環境空間には、単なる便宜主義ではない心意性を指摘できます。

腰原：対象は川で、山や木ではないのですか？

千家：本源の祭祀対象はY字状の流路の上側に存在ですが、そうした山・木を画するように流れる川・水の重要性を聖地空間設定に関わって注視したいのです。人間が生きる営みに必須の良水をもたらすのは山、森です。その水により人間の生の営みは歴史的展開を繰り返しています。古代の祭祀遺跡に水に関わるものが非常に多いのも理由のないことではありません。

平沼：現在もその古代人たちが守ってきた水の域がそのまま手が加えられることなく、保全をされているということですね。この地の地形についても教えてください。参拝にきて鳥居をくぐると、この地にしかない下り参道が気になります。やはり自然環境がそのまま利用されてきたということなのでしょう。



千家和比古
(出雲大社権宮司)



平沼孝啓
(平沼孝啓建築研究所主宰)



佐藤先生と腰原先生

千家：境内の正面にあたる南側は自然砂丘ですが、そこから進入に際して下り参道になります。

腰原：あの辺は一切、人的に加工したのでは無く、自然の地形の中に建てられているということですね。

千家：参道の入り口になりますが、境内の正面南端を遮蔽するように砂丘が伸びています。それによって境内は「籠り」の空間を生成しています。

腰原：その自然の起伏の中で、最後はここにたどり着くという仕組みになっているんですね。

佐藤：川が河合で出会って、海に流れていきますが、海も何かの重要な要素を持つのでしょうか。海岸が近いので何か関係があったかもしれないと思ったのです。

千家：今の正面門前の神門通りという道は、大正元年に開設された大社駅からの参詣道として敷設された新しいものです。それ以前は、山沿いの道と、海沿いからの道が基本です。

腰原：港から海沿いに戻ってくる道と両方が参道だったんですね。そうするとやはり山と海とこの場所は何か関係がある気がしますね。

平沼：うんうん。参加学生たちがこの地形を歩き、読み解くとおもしろいですね。そして古代人が造られ継がれてきた大社は、街を中心に広がってきたのでしょうか。それとも人々の生活がすぐであって、その中に大社が造られたのでしょうか。

千家：古代的には、集落があつてその只中に祭祀場を設置ということではなく、自然と一体化する何かがあると観想される場を聖地空間として選地したと思います。出雲大社で言えば、弥生時代には日常生活の場、集落は低湿地を挟んだ南側の対岸に広がっている別の砂丘の方に展開していたようで埋葬の場もそちらです。大雑把に括れば弥生時代以来、境内側域は聖地空間として意識されていったと思われます。

腰原：逆にその普通の世界と縁を切ると言うか、聖域を作ろうという意識があったということでしょうか。

千家：祭祀的な場を日常性から画する意識はあったと思います。

佐藤：今年、境内で開催させていただくワークショップに際して、学生たちが構築物を造る時にコンセプトや制作のプロセスのきっかけとなるキーワードを見つけようとするのですが、例えば、川の流れ方や地形といった水田との関係も含んで、環境の中から生まれた独特の形はありますか。

千家：自然ではなく歴史的環境からすれば、去年は伊勢神宮で建築ワークショップを開催ですが、伊勢神宮の神明造は平面長方形の平入りで水平方向の広がりが見覚的に看取される造形、出雲大社の大社造は平面方形の妻入りで御本殿本体は垂直方向の伸びが見覚的に看取される造形と言えます。この両建築の対照的相貌は、後付けかもしれませんが、伝承世界とリンクしているようにも思われます。出雲大社と伊勢神宮との御祭神関係の神話伝承世界では国譲りと言われる伝承があります。実際には国譲りと神譲りがセットで、大国主大神からは国譲りですが、大国主大神は天上の神々から神譲りをされる立場です。国の事を譲る代わりに神の事を譲られるという相互委譲関係です。そこで、国の事、つまり地上世界の行政統治権を譲られた側の天的世界を故郷とする神々の中心格の伊勢神宮の建物造形は、版図を広げるように横に広がる。それに対して、神の事を譲られた側の出雲大社の建物は、伊勢的な天的世界と自らの地的世界を繋ぐ造形の建物になっています。そういう対照的な造形が起源伝承と絡め解釈できます。『日本書紀』の本文ではなく一書に、国譲り・神譲り伝承が詳述されていますが、そこに出雲大社本殿の建物構造について述べています。ここで指摘したいのは三つの橋の整備です。浮橋、高橋、打橋。浮橋は下流の淀みに造るような棧橋状の施設。今で言えば階段下の浜床。海との繋がりを意識したもので実態的に御本殿には水平方向の属性もあります。高橋は昇降の階段。問題は「打橋」です。『万葉集』にあります。水流に勢いのある上流に構築する頑丈な橋のこと。これを「天安河」に備えるとあります。天安河とは天的世界と地的世界の境界の川。そこに橋を架けるとは天～地の世界を繋ぐ往来機能の通路としての橋を意味します。これは御本殿内の最大径の中心柱である心御柱（岩根御柱）に相当します。雲を描いた天井を貫く唯一の柱です。神の事を譲られた側は天地を繋ぐ高層造形の建物に、国の事を譲られた側は地上を這う低層造形



佐藤 淳
(構造家 | 東京大学准教授)



腰原 幹雄
(構造家 | 東京大学生産技術研究所教授)



平沼孝啓と千家権宮司

の建物にという伊勢と出雲の建築様式、造形の違いが伝承世界から意味的に見えてきます。

平沼：すごく分かりやすかったです（笑）。そうすると、神宮の式年遷宮と大社の大遷宮とは全く違うものですか。

千家：遷宮とは祭祀起源伝承の再現によって理想の初発一始まりの活気に立ち返るという意味を内在すると理解していますが、その点では同じです。しかし、その起源伝承の内実が違います。伊勢神宮の起源伝承は、本来的祭祀地である大和から伊勢への遍歴による祭祀起源伝承です。伊勢神宮の問題は、建物構造的には全く機能しない床下で留まる心御柱の存在性です。現在、心御柱は神殿建物が出来上がった後の最終段階での建立です。これは後世の変容で、古代の『皇大神宮儀式帳』では全く違います。最初に全体の御用材の伐り出しのお祭りを対象の山の口で行います。これは今も同じです。そして後日の夜、心御柱だけの伐り出しのお祭りをその対象木の前で行います。注目すべきはその後の夜、神殿建設予定地で草刈、心御柱の穴掘、鎮め物の埋納という地鎮のお祭りをし、同夜続いてそこに心御柱を建てることです。伊勢神宮の遷宮意味の核心は、本来、心御柱を建ててから神殿建物を造営し始めることだと私は考えます。伊勢神宮で夜に行う祭りは、心御柱に関わる時、建築後の遷座の時です。なぜ夜か、夜は神に関わる時間帯だからです。地鎮のお祭りは、「この土地を使用させていただきます」ということですが、この心御柱の建築構造上に無関係の実態、神殿造営に先立つての建立から想起するのが古代伝承で知られる神による土地占め伝承です。そこでは杖状のものを地に挿す行為があります。土地占めの象徴的な印で、土地の霊、地霊に対する儀礼行為です。民俗事例でも一夜の野宿のための土地利用一借用地霊に対するシバサシという習俗があり、驚くことに現代でも相似例があります。岐阜県の調査事例です。あるお爺さんが家を改築するために一度解体をします。一般的にはすぐに地鎮祭をして工事に入りますが、そのお爺さんは解体後、土地を野ざらしにして雑草が生えてくるのを待ちます。土地とは、本来的には土地の神様のものであると。そこで改築となれば、土地の神様に一旦お返しをしなければいけない。雑草が生えてきたことがお返しした状態で、そこで草刈りをし地鎮祭をして改めて地霊から借り受けるのだそうです。こうした一連の事象の心意は、伊勢神宮の心御柱、遷宮を考える時に極めて重要な示唆を与えます。出雲大社の場合、同様に起源伝承からすれば、一つの意味と

して、天的世界と地的世界を結ぶという相互の補完意識から、建物構造的には両世界の繋ぎの象徴的表象である天安河に架ける打橋一心御柱（岩根御柱）の架け替えの意味を持っていると思っています。

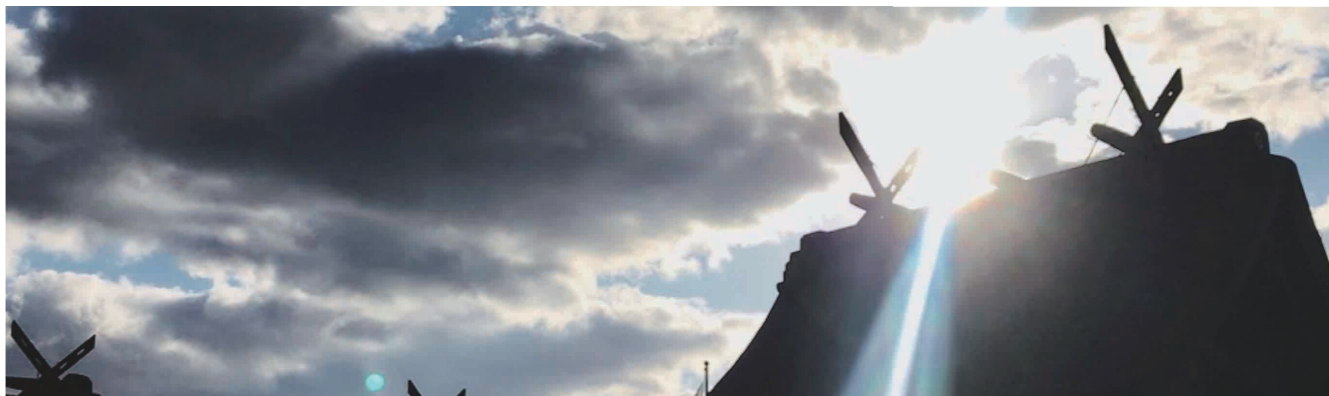
腰原：お伊勢さんのように交互に土地を返して借り受けて、ということではなく、出雲の場合はその場所で上と繋がりが続いているといけないうことですか。

千家：日本列島に生き営む人々の特性である相対性の心意相の中に、伊勢も出雲もあるのだと思います。天的世界の神々と地的世界の神々是对立ではなく、二つのコミュニティーが補完関係を基軸として相対し繋がって、全体としての神々のコミュニティーを形成するという構造的理解の心意相です。夫婦・家族世界と相似です。それが日本の神々世界の構造であり、その表徴核心が往來のための打橋と理解しています。そこに、地的世界の中心格の出雲大社の存在性の一端を看取できます。

腰原：それは9本柱の2間ということにも現れているのでしょうか？普通こういったところでは3間にして、真ん中をつくろうとします。ここは2間なので非対称で、入り口も神様も非対称なところで、真ん中ではないですね。そういう真ん中とか非対称という話は、先ほどの相対の話に繋がる気がしています。建物が3本×3本の9本の柱であって4つの空間に相当する部分の右奥を神様が使われていることの特異性という意識はありますか。対称でないことを目指しているのかなと思っています。

千家：聖なるものに対し、正面直進を避けることが一つあると思います。祭祀的建物跡と思われる考古学上の遺構の場合、囲む柵・垣の入り口の左右両側を互い違いにずらし重ねて目隠し状態にし、屈曲進入するように設えられている例がよく知られています。この境内でも、賽路が真っ直ぐのように見えても斜めとか、御本殿に向って正面真っ直ぐな通路というのはありません。

平沼：ここにいる僕たちが大社への建築愛を持ちすぎて、延々お聞きしたい気持ちになりますが、学生主体のワークショップ開催の座談会です（笑）。最後に、出雲にやってきて頑張ろうとする学生に向けて、千家権宮司様から励みとなるお言葉をいただければいいでしょうか。



御本殿



座談会の様子

千家：御本殿を仰ぎ見て想うのは、後姿が想像力を掻き立てることです。正面姿はこれがそうだという明瞭な気持ちになる訳ですが、後姿にはなかなか観えない、分からない不思議さがあります。見る人をして、そういう想像力を掻き立てる後姿的な造形をと期待しています。

一同：貴重なお話をくださり、本日は誠にありがとうございました。

(平成31年1月27日 出雲大社・社務所にて)

—— 大変貴重なお話をお聞かせいただき、本日はどうもありがとうございました。この対談を通じて、このワークショップが参加学生にとって、とても貴重で意義深いものと確信いたしました。そして将来、この場所で開催した意義につながっていくような、提案作品を募りたいと思います。

聞き手：原之園健作 (AAF | 建築学生ワークショップ運営責任者)